

発表④：「スタンダード実践を振り返って」

中西令子先生(モンゲニ統合学校)

モンゲニ学校4年生のスタンダード実践授業は、2012年9月半ばから始めた。授業準備のため、夏休みから、本を読んだり、日本センターの授業(『まるごと』を使ったクラスや、漢字のクラス)を見学したりしながら、自分の勉強を始めた。

実践授業開始当初は、自分がやっていることが本当にスタンダードに沿っているのか分からなかったし、今までの授業の形式を変えてもいいのか、授業のやり方や教師の様子が変わったことで生徒がどんな反応をするのか、とても不安だった。人に相談したいが、自身がスタンダードというものを消化できていないので何を相談したらいいのかも分からず、毎日試行錯誤だった。

スタンダードの成果・効果は現段階ではまだうまく説明できないし、言える状態ではない。「スタンダードが必要である」「スタンダードがあれば統一した教科書ができるし、日本語オリンピックもできる」などということは分かっているが、多くの困難があり、なかなか難しいというのが本音である。

なるべく生徒たちと接して生徒のことを知ろうと努力しているが、モンゴル人の考え方と日本人である私の考え方はどうしても違うところがあり、自分がおもしろいと思ったことでも、生徒にはおもしろいと思ってもらえないこともある。

例) 時刻の勉強を始める際に…

T「もしこの世に時間がなかったら、どうする？」 S「……そんなことがあるわけない。」
変な質問をしたのだろうか？それとも生徒たちの想像力が養われていないのだろうか？モンゴルの生徒にはもっと現実的な話題のほうがいいのだろうか？などと悩んだ。

しかし、約3か月後、これがスタンダードにつながるのかもしれないという会話があった。

例) 学校というトピックを出す際に…

T「もし世界に学校がなかったら、どうする？」

S「ものを学べない。」

T「(これは自分の言葉ではなく、先生や親から教えられた答えだろう。)じゃあ、ほかには、どう？」

S「…。(しばらく考えている。)」

S「本を読むことができない。」「買い物に行ってもだまされる。」

「いや、だますほうもだませない。」「いやいや、だましたかだまされたかも分からないよ。」

教師の多くは、「学習者よりも自分のほうが日本語をよく知っているから、それを教えてあげよう」という考えで今まで授業をしてきたことだろう。しかし、最近感じるようになったのは、学習者に答えをせかさないうこと、じっくり待つ学習者自身の答えが出てくるのを待つこと、学習者はみんな同じではない(育ってきた環境が異なる)からそれぞれの気持ちを考えること、などの大切さである。

また、授業風景をビデオにとることの大切さにも気が付いた。第三者的な立場で自分自身を振り返ることもできる。実際、いいと思っていた教室活動も、ビデオを見て「こんな状況は実際にはありえない」と初めて気づくこともあった。もっと学習者の目線で考えなければならない。

例) 時計の絵カードを使い自分たちで針を動かしながら、「今何時ですか」「〇時です」と言い合う。

学習者（特に生徒・子ども）の成長は著しく、それにあわせて Can-do の内容も変えていくべきである。だから教師は学習者の成長と日常生活をよく観察する必要がある。そして、従来のような知識を教え込む授業ではなく、学習者の日常に即した、楽しい授業内容にしていきたい。

質疑応答

Q1 （両校の先生へ）教案を作っているのか。

A1 発表内では触れなかったが、作っている。

Q2 （両校の先生へ）JF スタンドは成人学習者向けの内容だが、それをどうやって子供学習者向けに変えているのか。変えるポイントは。

A2 子供の生活・状態に視点をあて、この学年ならどんな話題がいいか、どんな生活をしているか、といったことを考えて、作り直している。

Q3 （中西先生へ）教育対象として、UB 市内の子供と、地方の子供の違いを感じたことがあるか。

A3 モンゲニとメルゲドを比較すると、まず生徒数が違う。モンゲニは1クラス1桁と少人数であるのに対し、メルゲドはとても多い。そうすると、クラスの元気さが違ってくる。また、UBは日本語学習環境が整っていて、たとえばモンゲニもいつも日本人の教師がいる。メルゲドは環境が整っていない分、子供たちは日本人を珍しがり、純粹で、子供らしい。

Q4 （ドラムスレン先生へ）ポートフォリオ、学習者たちの自己評価をどのように扱っているのか。

A4 単元が終わったら、テストをする。間違えたところを家や学校で復習し、その後ポートフォリオに入れる。教師は各学習者がどの程度理解できているかについて考え、理解が遅れている学習者には授業時間外で個別に教えるようにしている。

Q5 （両校の先生へ）このスタンダード実践の経過について、校長先生と逐次やりとりしているのか。もししているのであれば、それぞれの校長先生はどのようにおしゃっているのか。

A5 （モンゲニ）校長先生は非常に理解的であり、この先教科書を作るようであれば学校が費用を出そう、とまでおしゃっている。

（メルゲド）校長先生、教頭先生ともにすごく喜んで応援してくださっている。

Q6 （両校の先生へ）実践授業を開始するまでが本当に長かったことと思う。始める前と今を比べて、自分の中の変化について、教えてほしい。

A6 （オユングレル先生）以前は何年間も文法中心で教えていたので、準備しておけば問題なく授業ができた。でもスタンダード授業では、まず準備に試行錯誤し、40分の授業のために2~3時間準備することもある。それに、それが本当にスタンダード授業になっているのか、という悩み

もある。少し慣れてはきたが、もっと勉強してもっといい授業をしたい。

（アマガラン先生）とにかく最初は怖かった。始める前は、自分にできるかどうか怖くて、悩んで、泣いたこともある。でも、「やってみないと分からない。まずやってみたら、そこから問題が見えてくる。始まっていないのに、どうして心配しているの」と中西先生に叱咤してもらい、やって来られた。これからも頑張りたい。

（ドラムスレン先生）最初は分からないことが多く悩みがたくさんあったが、教えるしかないので、頑張った。少しは慣れてきたものの、今もどんな教え方がいいのか探している。